

シグナルとシグナレス

シグナル

シグナレス

電信柱

倉庫の屋根

ガタンコガタンコ、シュウフツフツ、
さそりの赤眼が見えたころ、
四時から今朝もやってきた。
遠野の盆地はまっくらで、
つめたい水の声ばかり。

ガタンコガタンコ、シュウフツフツ、
凍えた砂利に湯気を吐き、
火花を闇にまきながら、
蛇紋岩の崖に来て、
やっとう東が燃え出した。

ガタンコガタンコ、シュウフツフツ。
鳥が鳴きだし木は光り、
青々川は流れたが、
丘もはざまも一面に、
まぶしい霜を載せていた。

ガタンコガタンコ、シュウフツフツ。
やっぱりかけるとあったかだ。
僕はほうほう汗が出る。
もう七八里はせたいな、
今日も一日、霜ぐもり。

ガタンガタン、ギー、シュウシュウ

軽便鉄道の東からの一番列車が少し慌てたように、こう歌いながらやって来てとまりました。

機関車の下からは力のない湯気が逃げ出して行き、ほそ長いおかしな形の煙突からは青いけむりが、ほんの少し立ちました。

軽便鉄道付きの電信柱は、やっと安心したようにぶんぶんとうなり、シグナルの柱はかたんと白い腕木を上げました。

このまっすぐなシグナルの柱は、シグナレスでした。

シグナレス「今朝は伯母さんたちも、きつとこつちの方を見ていらっしやるわ」

シグナレスはほっと小さなため息をついて空を見上げ、しずかに東へ流れていく雲をながめました。

「カタン」

後ろの方のしずかな空でいきなり音がしました。見ると、黒い枕木の向こうにあの立派な本線のシグナル柱が、はるか南からやってくる列車を迎える為に硬い腕を下げたところでした。

シグナル「おはよう。今朝は暖かですね」

シグナレス「おはようございます」

電信柱「若さま、いけません。これからはあんなものにやたらに声をかけなさないように願います」

本線のシグナルに夜電気を送る太い電信柱が、さも勿体ぶって申しました。

雲の縞は薄い琥珀の板のようにはるみ、かすかな日光が降ってきました。

電信柱は嬉しがって、向こうの野原に行く小さな荷馬車を見ながら、低く調子はずれの歌をやりました。

ゴゴン、ゴーゴー、

うすい雲から酒が降り出す、

酒の中から霜が流れる。

ゴゴン、ゴーゴー、ゴゴン、ゴーゴー、

霜がとければ、土はまっくろ。

馬はふんごみ、人もべちゃべちゃ。

ゴゴンゴーゴー

シグナル「どうか気にかけて下さい。こいつはもうまるで野蠻なんです。礼式も何も知らないのです。実際、私はいつでも困ってるんですよ」

シグナレス「あら、そんなことございませんわ」

シグナル「許してくださいさるんですか。本当を云ったら僕なんか、あなたに怒られたら生きている甲斐もないんですからね」

シグナレスは困ったというように肩をすぼめました、その少しうつむいた顔は嬉しさにぼっと白光を出していました。

シグナル「シグナレスさん。どうかまじめで聞いて下さい。」

僕、あなたの為なら次の十時の汽車が来るとき、腕を下げないでじっと頑張り通してでも見せますよ」

シグナレス「あら、そんな事いけませんわ」

シグナル「勿論いけないですよ。そんなこと、あなたの為にも僕の為にもならないから、やりはしませんよ。」

けれども、そんなことでもしようと云うんです。

僕、あなたくらい大事なものは世界中ないんです。

どうか僕を愛して下さい」

ゴゴン、ゴーゴー、
やまのいわやで熊が火をたき、
あまりけむくて、ほらを逃げ出す。
ゴゴン、ゴーゴー。ゴゴン、ゴーゴー。

シグナル「シグナレスさん、あなたはお返事をして下さらないんですか。

ああ、僕はもうまるでくらやみだ。目の前がまるでまっ黒な淵のようだ。

ああ、雷が落ちて来ていつぺんに僕のからだを砕け。足もとから噴火が起こつて、僕を空の遠くに放り投げろ。もう、何もかもおしまいだ。

雷が落ちて来ていつぺんに僕のからだを砕け。足もと…」

電信柱「いや、若さま。雷が参りました節は、手前一身におんわざわいを頂戴いたしますので、どうかご安心を願いとう存じます」

シグナル付の電信柱が頭の上のはりがねの槍をぴんと立てながら、眼をパチパチさせて云いました。

シグナル「えい。お前なんか何を云うんだ。僕はそれどこじゃないんだ」

電信柱「それは又、どうしたことでござりまする。ちよつと、やつがれま

でお申し聞けになりとう存じます」

シグナル「いいよ、お前はだまっておいで」

シグナルは高く叫びました。雲がだんだん薄くなって、柔らかな陽が射して参りました。

五日の月が西の山脈の上の黒い横雲から、もう一ぺん顔を出して鈍い鉛のような光で、そこらをいつぱいにしました。

冬がれの木や積み重ねられた黒い枕木はもちろんのこと、電信柱までみんな眠ってしまいました。遠くの風の音か水の音がごとくと鳴るだけです。

シグナル「ああ、僕はもう生きてる甲斐もないんだ。汽車が来るたびに腕を下げたり青いめがねをかけたたり、一体何の為にこんな事をするんだ。もう何にも面白くない。

ああ、死のう。けれどもどうして死ぬ。やっぱり雷か噴火だ」
シグナル「シグナルさんもあんまりだわ。あたしが云えないでお返事出来ないのを、すぐあんなに怒っておしまいになるなんて。

あたし、もう何もかもみんなおしまいだわ。
おお、神様。シグナルさんに雷を落とすとき、一緒に私にもお落としくださいませ」

シグナル「シグナルスさん、あなたは何を祈っていられますか」

シグナル「あたし存じませんわ」

シグナル「シグナルスさん、それはあんまりひどいお言葉でしょう。

僕は今すぐでも、お雷さんに潰されて、又は噴火を足もとから引っかかり出して、又はいさぎよく風に倒されて、又はノアの洪水を引つかぶって死んでしまおうと云うんですよ。それなのに、あなたはちっとも同情して下さらないんですか」

シグナル「あら、その噴火や洪水を。あたしのお祈りはそれよ」

シグナル「シグナルスさん、なぜあなたは死ななけあならないんですか。

ね、僕へお話しください。きつと僕はそのいけないやつを追っ払ってしまいますから」

シグナル「だって、あなたがあんなにお怒りなさるんですもの」

シグナル「その事ならばご心配ありません。

僕ちっとも怒ってなんか居はしませんからね。僕、もうあなたの為なら、めがねをみんな取られて、腕をみんなひっぱなされて、

それから沼の底へたたきこまれたって、あなたをうらみはしませんよ」

シグナレス「あら、ほんとう。嬉しいわ」

シグナル「だから僕を愛して下さい。さあ、僕を愛するって云って下さい」

シグナル「またあなたは黙ってしまったんですね。やっぱり、僕がきらいなんでしょう」

シグナレス「あら、ちがいますわ」

シグナル「そんならどうですどうです、どうです」

シグナレス「あたし、もう大昔からあなたのことばかり考えていましたわ」

シグナル「本当ですか、本当ですか、本当ですか」

シグナレス「ええ」

シグナル「そんならいいでしょう、結婚の約束をして下さい」

シグナレス「でも」

シグナル「でも、何ですか。僕たちは春になったら燕に頼んで、みんなにも知らせて結婚の式をあげましょう。どうか、約束して下さい」

シグナレス「だって、あたしはこんなにつまらないんですわ」

シグナル「わかってますよ。僕にはそのつまらないところが尊いんです」

シグナレス「でも、あなたは金で出来てるでしょう。新式でしょう。赤青めがねも二組まで持っていらっしやるわ。夜も電燈でしょう。あたしは夜だってランプですわ。めがねもただ一つきり、それに木ですわ」

シグナル「わかってますよ。だから僕はすきなんです」

シグナレス「あら、ほんとう。嬉しいわ、あたしお約束するわ」

シグナル「ありがとう。僕もお約束しますよ、あなたはきっと私の未来の妻

だ」

シグナレス「ええ、あたし決して変わらないわ」

シグナル「エンゲージリングをあげますよ、そらねあすこの四つならんだ青い星ね」

シグナレス「ええ」

シグナル「あの一番下の足もとに小さな輪が見えるでしょう。あの光の輪ね。

あれを受け取って下さい。僕のまごころです」

シグナレス「ええ、ありがとう。いただきませすわ」

倉庫の屋根「ワッハッハ。大笑いだ。うまくやってやがるぜ」

突然、向こうのまつ黒な倉庫が空にもはばかるような声でどなりました。

二人はまるでしんとなくなりました。

倉庫の屋根「いや、心配しなさんな。このことは決してほかへはもらしませんぞ。わしがしっかり呑みこみました」

その時です。お月様がカブンと山へお入りになって、あたりがポカッとうす暗くなったのは。

今は風があんまり強いので電信柱どもは、本線のほうも軽便鉄道のほうのもまるで気が気でなく、ぐうんぐうんひゅうひゅうと独楽のようになっています。

それでも空は真っ青に晴れていました。

シグナルは、今日は巡査のようにしゃんと立っていました。風が強くて電信柱に聞こえないのをいいことにして、シグナレスに話しかけました。

シグナル「どうもひどい風ですね。頭がほてって痛みはしませんか。どうも僕は少しくらくらしますね。

ね、あの倉庫のやつめ、おかしなやつですね。いきなり僕たちの話してるところへ口を出して、引き受けたの何のつて云うんですもの。あいつは随分太ってますね。今日も眼をパチパチやらかしてますよ。僕のあなたに物を言ってるのは分かっています。何を言ってるのか風で一向聞こえないんですよ。けれども全体、あなたに聞こえてるんですか。

僕たち、早く結婚したいもんですね。早く春になればいいんですね。僕のとこのぶつきりこには少しも知らせないでおきましょう。

そしておいて、いきなり…ウヘン。ああ、風でのどがせいぜいする」

風がまるで熊のように吼え、まわりの電信柱どもは山いっばいの蜂の巣を壊してでもしたようにぐわんぐわんとうなっていました。

シグナル「僕はもうあなたの為なら、次の汽車の来るとき腕を下げないことでも何でもするんですからね。

あなたは本当に美しいんです。ね、世界の中にだって僕たちの仲間はいくらもあるんでしょう。その中であなたは一番美しいんです。もっとも他の女の人、僕よく知らないんですけどね。

きつとそうだと思うんですよ。どうです、聞こえますか。

僕のとこのぶつきりが何をあなたに云ってるのかと思つて、一生懸命、目をパチパチやつてますよ。こいつと来たら全くチョークよりも形が悪いんですからね、そら、今度はあんなに口を曲げていますよ、呆れた馬鹿ですねえ、僕の話聞こえますか……」

電信柱「若さま。さつきから何をべちやべちや云つていらつしやるのです。

しかもシグナレス風情と一体何をにやけていらつしやるんです。

さあ、仰い。役目として承らなければなりません」

シグナル「馬鹿、僕はシグナレスさんと結婚して幸福になつて、それからお前にチョークの嫁さんをくれてやるよ」

シグナレスは恐いながら思わず笑つてしまいました。さあ、それを見た電信柱の怒りようと云つたらありません。

ブルブルと震えあがり唇をきつと噛みながら、風下にいる軽便鉄道の電信柱に、二人の対話が何だつたのか今シグナレスが笑つたことは、どんなことだつたか訊ねてやりました。

電信柱「くそ、えいっ。いまましい、あんまりだ。若さま、わたしだつて男ですぜ。こんなにひどく馬鹿にされて黙つているとお考えですか。結婚だなんてやれるならやつてごらんさい。電信柱の仲間にはみんなもう反対です。シグナル柱の人たちだつて鉄道長の命令にそむけるもんですか。そして鉄道長はわたしの叔父ですぜ。結婚なり何なりやつてごらんさい」

電信柱はすぐ四方に電報をかけました。それからしばらく顔色を変えてみんなの返事を聞き、確かに反対の約束をもらつたらしいのです。

それからきつと叔父の鉄道長とかにもうまく頼んだに違いありません。

電信柱はすっかり反対の準備が出来るると今度は急に泣き声で言いました。

電信柱「ああ、八年の間、夜ひる寝ないで面倒見てやってそのお礼がこれか。ああ、情けない。もう世の中は乱れてしまった。

オンオンオンオン、ゴゴンゴゴゴ、ゴゴンゴゴ」

風はますます吹きつのも、西の空が変に白くぼんやりなって、どうも怪しいと思っっているうちに、チラチラチラチラとうとう雪がやって参りました。

シグナレスはしくしく泣きながら、丁度やってくる二時の汽車を迎えるためにしょんぼりと腕を下げ、そのいじらしい撫肩はかすかに震えておりました。

空では風がフイウ、涙を知らない電信柱どもはゴゴンゴゴゴ、ゴゴンゴゴゴ。

シグナル 「シグナレスさん、本当に僕たちはつらいねえ」

シグナレス 「ええ、みんなあたしがいけなかったのですわ」

シグナル 「ああ、シグナレスさん。僕たちたった二人だけ、遠くの遠くのみんなの居ないところに行ってしまったいね」

シグナレス 「ええ、あたし行けさえするならどこへでも行きますわ」

シグナル 「ずうつとずうつと天上に、あの僕たちのエンゲージリングよりももっと天上に青い小さな火が見えるでしょう。そら、あすこは遠いすね」

シグナレス 「ええ」

シグナル 「あすこには青い霧の火が燃えているんでしょね。その中へ僕たち、一緒に坐りたいすね」

シグナレス 「ええ」

シグナル 「ああ、お星さま。遠くの青いお星さま。どうか、私どもをとって下さい。どうか、私どものかなしい祈りを聞いて下さい」

シグナレス 「ええ」

シグナル 「さあ、一緒に祈りましょう」

シグナレス 「ええ」

星はしずかにめぐって行きました。

赤眼のさそりがせわしく瞬いて東から出てきて、お月様が慈愛にみちたまなざしにじつと二人を見ながら西の山にお入りになったとき、二人は祈りに疲れでもう眠っていました。

今度は昼間です。なぜなら夜昼はどうしてもかわるがわるですから。

倉庫の屋根「おい。本線シグナル付きの電信柱。おまえの叔父の鉄道長に早くそう云って、あの二人は一緒にしてやった方がよからうぜ」

倉庫の屋根は赤いうわぐすりをかけた瓦を、まるで鎧のようにキラキラ着込んで、じろつとあたりを見まわしているのです。

電信柱「ふん、何だと。お前は何の縁故でこんなことに口を出すんだ」
倉庫の屋根「おいおい、あんまり大きなつらをするなよ。てめいのような変ちきりんはあんまりいろいろ手を出さない方が、結局てめいの為だろうぜ」

電信柱「何だと、俺はシグナルの後見人だぞ。鉄道長の甥だぞ」
倉庫の屋根「そうか、おい立派なもんだなあ。シグナルさまの後見人で鉄道長の甥かい。けれどもそんなら、俺なんてどうだい。

俺さまはな、ええ、めくらとんびの後見人、風引きの脈の甥だぞ。
どうだ、どっちが偉い」

電信柱「何を。コリツ、コリコリツ、カリツ」
倉庫の屋根「まあまあ、そう怒るなよ。これは冗談さ、悪く思わんでくれ。

な、あの二人さ可哀想だよ。いい加減にまとめてやれよ。大人らしくもないじゃないか。あんな立派な後見人をもって、シグナルも本当にしあわせだと云われるぜ。な、まとめてやれ、まとめてやれ」

電信柱は物を云おうとしたのですが、あんまり気が立ってしまって、パチパチパチパチ鳴るだけでした。

倉庫の屋根もその怒りように、少し呆れて黙ってその顔を見ていました。

シグナルとシグナレスはため息をついて、お互いに顔を見合わせました。

今夜は暖かです。霧がふかくふかくこめました。その霧を徹して月の明かりが水色に少しずつ降り、電信柱も枕木もみんな寝静まりました。

倉庫の屋根「お前たちは全く気の毒だね。わたしは今朝うまくやってやろうと思っただが、却っていけなくしてしまった。本当に気の毒なことになったよ。お前たちは霧でお互いに顔も見えず寂しいだろう」

二人「ええ」

倉庫の屋根「そうか。では、俺が見えるようにしてやろう。いいか、俺の後を
ついて二人一緒に真似をするんだぜ」

二人「ええ」

倉庫の屋根「では、アルファー」

二人「アルファー」

倉庫の屋根「ビーター」

二人「ビーター」

倉庫の屋根「ガムマア」

二人「ガムマア」

倉庫の屋根「デルタア」

二人「デルタア」

シグナル「おや、どうしたんだらう。あたり一面、まっ黒びろうどの夜だ」
シグナレス「まあ、不思議ですわね。まっ暗だわ」

シグナル「頭の上が星で一杯です。なんという大きな強い星なんだらう。それに見たこともない空の模様ではありませんか。僕たち、全体どこに来たんでしょうね」

シグナレス「あら、空があんまり速くめぐりますわ」

シグナル「ええ、あの大きな橙の星は地平線から今上ります。おや、地平線じゃない、水平線か。ここは夜の海の渚ですよ」

シグナレス「まあ、奇麗だわね。あの波の青びかり」

シグナル「ええ、あれは磯波の波がしらすです。行ってみましょう」

シグナレス「本当にお月さまの明かりのような水よ」

シグナル「もう何べん空がめぐったでしょう。たいへん寒くなりました。海が何だか凍ったようですね。波はもう打たなくなりました」

シグナレス「波が止んだせいでしょうかしら。何か音がしていますわ」

シグナル「どんな音」

シグナレス「夢の水車の軋りのような音。あら、何だか周りがぼんやり青白くなってきましたわ」

シグナル「夜が明けるのでしょうか。いやはてな。おお、立派だ。あなたの顔がはっきり見える」

シグナレス「あなたもよ」

シグナル「とうとう、僕たち二人きりですね」

シグナレス「まあ、青白い火が燃えていますわ。地面も海も。けど熱くないわ」
シグナル「ここは空ですよ。これは星の中の霧の火ですよ。僕たちの願いが叶ったんです」

シグナル「地球は遠いですね」

シグナレス「ええ」

シグナル「地球はどっちの方でしょう。あたり一面の星、どこがどこかもう分からない。あの僕のぶつきりこはどうしたらう。あいつは本当はかあいそうですね」

シグナレス 「ええ。まあ、火が少し白くなったわ。せわしく燃えますわ」

シグナル 「きつといま秋ですね。そして、あの倉庫の屋根も親切でしたね」

倉庫の屋根 「それは親切とも」

気がついてみると、ああ、二人とも一緒に夢を見ていたのでした。

いつか霧がはれて空いちめんの星が青や橙やせわしく瞬き、向こうには真っ黒な倉庫の屋根が笑いながら立っておりました。

二人は又ほっと小さな息をしました。